

idea

ニュースレター「アイデア」

2024. 2

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | 一関コミュニティFM株式会社 放送局長 塩竈一常さん
- 3 | 団体紹介 | NPO法人一関文化会議所
- 5 | 地域紹介 | 矢の森自治会(東山)
- 7 | 企業紹介 | パサージュ 松川屋(大東)
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴④ ボランティアは「小間使い」ではない
- 9 | センターの自由研究 | 暮らし調査ファイルNo.24 「(家庭における)民間療法」

今月の表紙

藤原秀衡公ゆかりの金山址で、滝壺と藤の花の名勝である「藤壺の滝」。同滝も含め、義経公が野駆けした山「九郎森」や、愛用した「湯場」など「矢ノ森八景」と呼ばれる8つの史跡が東山町田河津の矢ノ森集落内に存在します。平成16年に同史跡の保存会が発足しますが、令和4年からは「矢の森自治会」で保存活動を行っています。(地域紹介)



発行 いちのせき市民活動センター せんまやサテライト 〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415 ホームページ: https://www.center-i.org/ メール: center-i@tempo.onn.ne.jp

idea

おしらせ

| | | |
|--|--|---|
| <p>会員募集</p> <p>「NPO法人一関文化会議所」 会員募集</p> <p>本誌「団体紹介」で紹介した「NPO法人一関文化会議所」では、会員を募集しています。年齢、性別、居住地等は不問で、活動に興味があれば誰でも入会可能。入会時に希望があれば、同法人が刊行している書籍を進呈します(入会特典)。詳しくは下記まで。</p> <p>主な活動:理事は4つの委員会で活動 ①事業委員会 ②奨励委員会 ③子ども委員会 ④総務委員会</p> <p>入会費:〈正会員〉1,000円 ※個人、団体ともに</p> <p>年会費:〈正会員〉3,000円(個人) 10,000円(団体) 〈賛助会員〉2,000円(個人) 10,000円(団体)</p> <p>問合せ:0191-32-4333 (一関文化センター内)</p> | <p>イベント</p> <p>第10回 そげいのひなまつり</p> <p>大東町曾慶の「手まりの会」が主催する「第10回そげいのひなまつり」は、一針一針想いを込めて縫い上げたつるし雛飾りや干支のぬいぐるみなど、100点以上を大東曾慶地区センター(一関市曾慶市民センター)内に展示するほか、今年は同会会員によるカエルマスコット制作ワークショップも実施。</p> <p>3月2日はラジオなどで活躍する河合純子さんを講師に迎え、地域づくり講演会も開催。詳しくは下記まで。</p> <p>開催日時:2024年3月1日(金) ~3月3日(日) 9時30分~15時</p> <p>会場:大東曾慶地区センター (大東町曾慶神蔭32-1)</p> <p>問合せ:0191-75-2244 (一関市曾慶市民センター)</p> | <p>イベント</p> <p>第15回 館ヶ森風祭り</p> <p>冬の恒例イベントとなった「館ヶ森風祭り」は、館ヶ森高原エリアを中心に、3週にわたり会場を変えながら開催。全会場共通で開催する「真冬の恐竜レース(会場でも恐竜の着ぐるみを販売)」のほか、第3週の花と泉の公園では、花泉高等学校の生徒が「花公園クイズラリー」を企画。詳しくは下記まで。</p> <p>第1週:〈日時〉2024年2月4日(日) 〈会場〉Ark館ヶ森 〈問合せ〉0191-63-5100</p> <p>第2週:〈日時〉2024年2月11日(日) 〈会場〉岩手サファリパーク 〈問合せ〉0191-63-5660</p> <p>第3週:〈日時〉2024年2月18日(日) 〈会場〉花と泉の公園 〈問合せ〉0191-82-4066</p> |
| <p>イベント</p> <p>「フットサルで国際交流」 参加者募集</p> <p>一関市国際交流協会では、スポーツを通じて市民と在住外国人がコミュニケーションをとる機会をつくらうと、下記日程でフットサルイベントを開催します(事前申込制/定員20名)。フットサルチーム「ヴィヴァーレー一関」の選手が基本を優しく指導します。フットサル未経験者でも安心して参加可能で、見学や応援も大歓迎。申し込みはQRコードを読み込むか、下記まで。</p> <p>開催日時:2024年2月25日(日) 13時~16時</p> <p>会場:一関修紅高校 体育館</p> <p>申込締切:2024年2月18日(日)</p> <p>問合せ:0191-34-4711 (一関市国際交流協会)</p> | <p>募集</p> <p>一関市・大東大原水かけ祭り 写真コンテスト</p> <p>「一関市・大東大原水かけ祭り(2024年2月11日開催)」に関する写真コンテストを開催します。県内外の方々に祭り参加の機会をつくる一環として行うもので、入賞作品は一関市大原市民センターロビーに1年間展示するとともに、賞状及び賞金等も贈呈。詳しくは下記まで。</p> <p>募集内容:2024年2月11日開催の「一関市・大東大原水かけ祭り」に関する単写真。詳細は要項(一関市HP内「一関市・大東大原水かけ祭りについて」のページに掲載。右のQRコードは当該ページを参照。※2024年2月26日(月)必着</p> <p>主催・問合せ:0191-72-2282 (一関市・大東大原水かけ祭り保存会(一関市大原市民センター内))</p> | <p>講座</p> <p>自治会長サミットvol.17 ~那覇市の事例で考える自治会の役割とは~</p> <p>自治会や民区、集落公民館などの三役レベルを対象とした情報交換の場「自治会長サミット」。今回は沖縄県那覇市とオンラインでゲストスピーカーを迎えます。151の自治会(市と連絡事務委託契約を締結している自治会)が存在する那覇市ですが、自治会加入率は15%を切っており、自治会空白エリアも約4割存在。当市の自治会事情と情報交換を行いながら、自治会の役割を改めて考えていきます。</p> <p>日時:2024年3月8日(金)17時~19時</p> <p>会場:一関市川崎市民センター 研修室</p> <p>定員:40名 ※参加無料、完全申込制</p> <p>申込締切:2024年2月29日(木)</p> <p>問合せ & 申込:0191-48-3735 (いちのせき市民活動センター千厩サテライト)</p> |

まちの写真展

スタッフがまちの1コマを切り取ります。

作品名 「川崎町にある『ナニコレ』な石碑」

全国のテレビ番組で紹介された「松井元哉 第113回医師国家試験不合格発表表閲覧之証」と書かれた石碑。川崎町の「なんでも企画」が奈良県在住の医師・松井さんの依頼で建立。自転車旅行で当地にいた際に不合格を知り、自身への喝で建立したのだとか。



旧町村別の人口動態等を共有します。

| | 人口 | 前月比 | 世帯数 | 前月比 |
|--------------|---------------|-------------|--------------|------------|
| 一関 | 53891 | -74 | 24553 | -43 |
| 花泉 | 11840 | -24 | 4688 | -7 |
| 川崎 | 3199 | -9 | 1267 | -3 |
| 千厩 | 9707 | -23 | 4083 | -4 |
| 大東 | 11750 | -21 | 4897 | 2 |
| 東山 | 5820 | -2 | 2275 | 1 |
| 室根 | 4349 | -5 | 1805 | 4 |
| 藤沢 | 7008 | -5 | 2773 | -1 |
| 一関市全体 | 107564 | -163 | 46341 | -51 |
| 出生数 | 28 | 3 | | |

2024年1月1日付
(2023年12月31日現在
住民基本台帳より)
※外国人登録者含む

177 / 107,564

塩竈 一常

平成24年4月に放送開始した「一関コミュニティFM」パーソナリティ。立ち上げから関わり、平成28年より放送局長に。一関二高卒業後、専門学校で放送を学ぶと、関西のコミュニティ放送パーソナリティへ。複数の放送局で経験を積み、平成19年には帰郷とともに奥州市の「奥州FM放送」の立ち上げにも尽力。昭和53年、一関市生まれ(在住)。



第114回 一関コミュニティFM株式会社 放送局長 塩竈一常 × いちのせき市民活動センター センター長 小野寺浩樹

「ラジオ」は市民の「広場」 ～「本音」をつないで、支える【前編】～

平成24年4月29日に放送を開始した「FMあすも」こと「一関コミュニティFM」。「コミュニティ放送」は超短波(FM)放送による地域密着型メディアとして平成4年1月に制度化されたもので、当市においては公設民営の放送局です。開局から間もなく12年を迎え、その存在が「当たり前」になりつつある中、改めて「市内にコミュニティ放送がある」意義を考えてみます(2回シリーズの前編)。

小野寺 10年一区切りという部分で、「ここまで」と「これから」を伺っていきたいのですが、まずはこれまでの10年間を、立ち上げから関わっている塩竈さんはどう見えていますか？

塩竈 自分の中で、最初の10年は一関に「ラジオのある生活」を定着させたいというのがありまして。一関は盛岡からの電波も仙台からの電波も弱いので、僕が子どもの頃は、ラジオを生活の中で聞いている人はそんなに多くない印象です。そんな地域に全戸にラジオが配られたときに「ラジオって楽しい」とまずは感じてもらいたいと思ってやってきました。

小野寺 塩竈さんはラジオに馴染みがあったんですか？

塩竈 東京の親戚の家に行くとき、商店街のお店で流れているのはラジオだったんです。みんなラジオを聞きながら仕事をしていて、交通情報やお天気など、

「次は〇時頃にお伝えします」って言うと、本当にその時間に流れてくる。子どもながらにすごく感動して(笑)。そのうちに自分なりの番組表を作ったり、リスナーとして投稿をしたり、ラジオを楽しんできました。

小野寺 確かにラジオって聞き続けることで、時間の把握とか生活の一部になりますよね。

塩竈 そう。でも聞き続けてもらうことが難しく。コミュニティFMでありがちなのが、とりあえず方言でしゃべって、地域の小ネタを細かく拾って、地域の良さやコミュニティ放送の意義などを伝える……。もちろんそれもいいんですが、僕からすればそれは赤ちゃんにいきなり「定食」を与えるようなもの(笑)。まずは「おかゆ」として、ラジオの基本的なものから与えるべきで、それも良質なおかゆが良いですね。「ラジオってこういうものなんだ」というものが実感できることが必要だと

思っています。

小野寺 なるほど。定着させるために、まずは健全で良質な放送を、と。僕も車で出張に行く際は行く先々のコミュニティ放送を聞くようにしてありますが、確かに一関は番組の作り込みとかクオリティが高いと思います。

塩竈 ありがとうございます。

ここまでの10年は、健全なラジオで赤ちゃんリスナー(＝市民)を育てると同時に、スタッフも育てなければいけなくて。僕は、大阪のコミュニティ放送などで仕事をしながらラジオの奥深さを知るのに10年はかかったのだと、新人のスタッフたちも10年だと思っていて。でも僕は10年育ってきたけど、育ててきたわけじゃないので、教え方がわからない。ならやっぱり、基本の、良質なものを背中で見せていくしかないのかな、と。

小野寺 コミュニティ放送には地域のローカルな情報が期待されるけど、実際には一口に地域と言っても幅広で。そのピックアップや、対象とする年代の絞り込みなどは、大変だろうなとは思っていました。そのため

にも10年かけて基本を作ってきたんですね。

塩竈 「伝える」って、ただ字面を追えば良いものではなくて、ニュアンスや熱の入れ方、タイミングなどを見極めないと、情報を垂れ流しているにすぎなくて。ローカルな情報であればなおさら、地名や用語などたどたどしく読んで瞬間に「あ、知ってて読んでくれたわけじゃないのね」って、今までの情報が全部崩れ去るじゃないですか(笑)

小野寺 ローカルな情報は漢字や言葉が難しいので、日頃からどれくらい地域を見ているかがわかってしまう(笑)。喋りの上手さ、リアクションの良さではなく、正しさ、分かりやすさとか「伝える努力」は必要ですね。

塩竈 そういう点でも、ようやくスタッフにもいろんな知識や経験がバランスよくついてきたので、いよいよどう地域性を取り上げて、FMあすもの魅力として重ねていけるか、ですね。

小野寺 地域に入っても、あすもが定着してきているなと感じる会話を聞くことがけっこうあ

ります。実際、どれくらい市民が聴いているものでしょうか？

塩竈 指標の一つとして、あすもを聞くことができるアプリのダウンロード数でいくと、約8万1千件ダウンロードされていて、そのうち毎日1回以上アプリを起動するアクティブユーザー数は5万2千件です。

小野寺 そんなにいらっしゃるんですか！市外の人も多い？

塩竈 一関出身の人が他県で聞いていると、親戚だったり。あとはコミュニティ放送では珍しくギャラクシー賞^{※4}にエントリーしているの、その関係で聞いている人もいます。

小野寺 関係人口や交流人口が増やそうなんてよく言われますが、わざわざそういう事業をするより、あすもが十分その機能を果たしていますね。

塩竈 ここまで定着したので、いよいよ地域に「あすもを使ってもらう」という段階です。使われないと意味がないので。

小野寺 行方不明の人やペット

の検索なども流れますよね。関連して、防災マストから流れる情報を、あすもでも流せないのかという声をよく聞きますが。

塩竈 防災マストから流れる情報(原稿)はあすもにも来ていて、熊の出没情報など、実はほとんど読んでるんです。ただ、防災マストと違い、自動的に流れるわけではないので、ずっと聞いていないと気づかない。また、普通に聞いている中で耳に残るような形で伝えていくのが「放送」であり、防災無線などは「通信」。放送と通信は昔は国の部署も異なっていたくらい、似ているようで違うんです。

小野寺 言われてみればそうですね。放送法等で一定の規制を受けている「放送」と、広義ではX(旧ツイッター)なども含む「通信」は意味合いが違う。情報を整理して、偏りなく、わかりやすく伝えるのが「放送」。

塩竈 はい。なのでラジオの中では「放送」として伝えますが、Xなどの「通信」を活用して、聞き逃した人へのカバーをする、という感じですね。

【後編へ続く】

※3 コミュニティFM向けのインターネット配信プラットフォーム「FM++(エフエムプラス)」を活用したもので、スマートフォンやパソコンで利用可能。難聴エリア解消を目的とし、インターネットを介して音声や文字放送を受信することができる。
 ※4 NPO法人放送批評懇談会が日本の放送文化の質的な向上を願い、優秀番組・個人・団体を顕彰するために、1963年に創設。テレビ、ラジオ、CM、報道活動の4部門制で、年間を通して定期的に番組/作品と向きあい、日々の放送の中から同协会会员が優秀作品を見つけていくのが特徴。

※1 リスナーから親しまれるFMを目指して愛称を公募。市内外の110人から延べ203点が寄せられた。
 ※2 平成7年の阪神・淡路大震災直後は急激に事業者数が増加。令和5年12月現在、開局中の事業者数は300を超える。

団体紹介

「ふるさと創生」「文化創造の心」を掲げて

NPO法人一関文化会議所

平成2年10月発足、平成13年2月に法人化。主に4つの委員会(事業委員会・奨励委員会・子ども委員会・総務委員会)で独自の文化事業等を企画。現在の会員は、正会員が個人56名と4団体、賛助会員が個人34名と1団体(令和5年4月時点)。

住所 一関市大手町2-16(一関文化センター内)
TEL 0191-32-4333
HP <http://www.npo-ichi-bunka.com/>



左の写真：理事会後の集合写真(令和5年12月)

国の事業をきっかけに 公設民営でスタート

昭和63年、「ふるさと創生1億円事業(通称)」で各市町村に1億円の交付金が配分されました。一関市(当時)においてもその用途を検討するため、平成元年1月に市民からの意見や提言を募集。188件の声寄せられました。

集まった意見を基に用途の検討を行うため、平成元年4月、市内の文化・教育・福祉団体や学識者などで構成する「一関ふるさと創生懇談会」を設置。その中で必要性が高いと考えられたのが「行政では踏み込めない分野での市民が取り組む文化活動の推進」でした。文化活動の推進を図るため、1億円の交付金を「ふるさと創生基金」とする案で、平成元年9月、一関市長(当時)へ答申が提出されました。

NPO法人一関文化会議所

任意団体から法人化 指定管理者としても

一関文化センター内に事務所を構えると、平成3年度より助成事業を開始(平成8年度より平成27年度は奨励事業として展開)します。歴史、音楽、郷土芸能、美術等、市内で文化活動に取り組む様々な団体の活動を支援してきました。同会の性格上、設立時から法人化を模索していましたが、当時は適当な法人がありませんでした。転機となったのが、平成10年3

る郷土を創るため、一関市民が行う文化活動の推進及び支援に関する事業を行い、以て市民の生活文化の向上に寄与する」ことを目的とする「一関文化会議所」が発足。公設民営の団体ですが、文化活動に新たな息吹を吹き込む取り組みとして、多くの期待を背負ったスタートでした。

※「文化的魅力あるまちづくりに関する提言、文化及び教育における表彰事業、芸術文化の推進、生活文化の向上に関する事業、文化活動に対する奨励等」

これからも設立時に掲げた「『ふるさと創生』『文化創造の心』を基本理念に『潤いと安らぎのある郷土創りと文化的魅力あるまちづくり』を目指し、活動し続けます。

月公布の「特定非営利活動促進法」。発足10周年を目前にして「手の届く法人格」ができ、10周年記念事業の準備と同時進行で特定非営利活動法人(NPO法人)の認証を得るべく定款等の検討を重ねます。平成12年10月、記念式典開催同月に設立認証申請書を提出、そして平成13年2月、晴れて念願の法人化を果たします。

市内の文化活動を黒衣として支えるために

発足当初から委員会形式で各事業の企画立案を行ってきた同会ですが、時代や実情に合わせて、委員会の形態や事業内容などをブラッシュアップしてきました。

現在は、理事を中心に、事業委員会(「一関ふるさと学習院」の開催、文化

講座集録の編集・刊行等)、奨励委員会(顕彰事業「一関文化賞・奨励賞」の贈呈)、子ども委員会(「一関ふるさと子ども探検隊」の実施、「東大生出前科学校授業」の開催等)、総務委員会(研修・視察事業、「会報」の編集・発行等)という構成で活動しています。

文化・芸術振興、まちづくり・地域づくりなどに顕著な功績のあった個人または団体へ贈られる「一関文化賞」は平成3年から続く事業です。理事長の内田正好さんは、「各分野で地道に活動している個人や団体に敬意を表し顕彰しているものです。私たちが活動で大事にしているのは、創設時の初心を忘れずに市内の文化活動や地域づくりなどで頑張る人たちに応援していくことです」と話します。

Q.活動で大切にしていることは?

理事長



うちだ まさよし
内田 正好さん
平成26年から現職。市内の文化や歴史等、紙芝居を交えた講演が好評でサロンや市民センターなどからの講師依頼が絶えません。

A. 心を豊かにする文化・芸術

一関文化センター館長



さとう たけお
佐藤 武生さん
「NPO法人一関のななか遺産を考える会」の理事長でもあり、地元・達古袋(殿美)の歴史を伝える活動にも力を入れています。

A. 市民の文化活動の黒衣役

- Photo



市内の文化活動を顕彰
令和5年度「一関文化賞」は2団体が受賞。受賞者には、表彰状とトロフィー、金一封を授与し、功績を称えます。

gallery -



科学の面白さを体験
東京大学の学生が講師を務める「出前科学授業」は、現役東大生と触れ合える機会とあって、子どもに人気の事業です。



平成14年から実施している「一関ふるさと学習院」は、市内だけでなく近郊地域の歴史・文化を学ぶことができます。

延べ4千人以上の参加

後世に繋ぐツール
記念誌はじめ、講座の集録集、市内の史跡や文化財をまとめた一関文化マップなど、10冊以上の書籍を刊行しています。



矢の森自治会(田河津)

行政区は田河津8区。42世帯121人(5班体制)が暮らす。7部会(総務、消防防災、生活環境、体育、史跡保存、地域づくり、納税貯蓄)に対し、自治会運営委員会(=役員)が各担当者(お世話係)として任命され、事業計画の立案、事業実施、各種団体との連絡調整を行っている。

左の写真：門松づくり後の集合写真(令和4年12月)



集落の課題から部会の見直しへ

平成18年に発足した矢の森自治会。各種団体の連絡調整機関として立ち上げると、納税組合を部会化し、翌年に「総務部」「消防防災部」「生活環境部」の3部会を、その翌年には「体育部」を設け、住民の文化・教養・健康を高める事業を展開してきました。それから14年を経た令和4年、地域の課題に向き合うため、2つの部会を新設したので。

東稲山の麓に位置する矢ノ森集落には「矢ノ森八景(藤壺の滝、曾我寺址、八枚、湯場、九郎森、頼朝の墓、天皇様、切支丹処刑場)」と称す歴史的史跡があり、その維持管理をするため、「矢ノ森史跡保存会」が平成16年から活動していましたが、高齢化で保存会の機能が徐々に低下し、令和2年頃から「解散」の二文字が……。

そこで、自治会としてその機能を担うべく、自治会組織に矢ノ森史跡保存会を組み入れる形で「史

矢の森自治会

東山

「互近所」支え合いの仕組みづくり

令和4年度に新設されたもう一つの部会「地域づくり部」は、「中山間集落機能強化加算事業」を実施するために設けた部会。同集落の「集落協定推進本部」から委託を受け、コミュニティサロン

跡保存部」を新設。東山町観光協会と協力(問合せ対応等は観光協会)しながら史跡保全をしています。藤の花が咲く頃には、保存会の一大事業として「藤まつり」を開催していましたが、現在は保全活動のみに縮小。「自治会も少子高齢化で人口が少なくなってきたいるのが現状であり、それぞれの史跡の維持管理(環境整備や清掃等)で手一杯であることは事実。大きなイベントの開催は難しいが、維持管理を通して集落の歴史にみんなで関わるといことは後世に繋げる継承の一つだと感じる」と自治会長の菅原理さんは語ります。

※1 本誌 平成26年11月号参照

した事業の復活には難しい面もあるそうですが、反面、外部交流や史跡の学習・保存活動、支え合いの活動強化など、新たに自治会で整えた仕組みも。少子高齢化だからこそ必要な取り組みを、着実に進めています。

の実施や高齢者支援を行っています。

これは「将来的には矢ノ森集落一つではなく、もっと大きな単位で取り組むべきもの」という考えのもと、「そのためにも部会が基盤づくりをしている段階」という位置づけです。

副会長の佐藤己義さんは、高齢化率50%超(令和5年3月末現在)となった同集落の一番の課題を「少子高齢化による高齢者世帯や一人暮らし高齢者の増加」とした上で、「子どもも子育て世代も少なくはなってきたが、いないわけではないので、史跡の保存と同様に集落全体で仕組みを作りその流れを次の世代に継承しつつ、常に課題と向き合うことも大切」と語ります。

令和5年度は合計8回のコミュニティサロンを実施したほか、高齢者等の自宅周辺除雪(依頼者5人)や一人暮らし高齢者の見守り活動(対象者5人)を行いました。菅原さんは、「時代背景に合わせ、組織の見直しを行いながら地域住民相互の親睦と連携を図ることが今後増々重要になってくるだろう」とこの先を見据えます。

核になる事業を大切に、時には取捨選択を

現在自治会で管理している、「愛花

夢館(アイカムカン)」は、自治会発足以前の平成9年に矢ノ森集落公民館として落成し、集落民から名称を公募。集落内各種団体の活動や住民交流の拠点として使用してきました。

3週に1回行う定期清掃は、4世帯ごとに班を作り輪番制で実施し、築26年経過した今でも、管理・整備が行き届いています。「この建物の自慢は、天皇様(集落にある神社。江戸期の創建で京都八坂より勧進したと伝わる)の参道に自生していた、ヤマボウシを和室の床柱としているところ。立派でしょ?」と2人でその柱を誇らしげに眺めます。

奥州藤原氏ゆかりの地として様々な史跡があり、保全活動のほか、集落全体で学ぶ機会(サロンでの学習会やパンフレットの作成など)を設けている同自治会。「昨年は、山形県鶴岡市の田川地区自治振興会有志(ぐら田川隊)が田河(田川)太郎行文ゆかりの史跡「曾我寺址」など史跡の見学や参拝に訪れ、情報交換等々の交流会を行った。集落にとっても地域の歴史を見つめ直すきっかけにも繋がった」と菅原さんは語り、「集落の交流拠点である愛花夢館で地域を超えた交流ができ本当に良かった」と佐藤さんも笑顔を見せます。

新年会(年祝い)等、コロナ禍で中止

Q.集落の自慢は何ですか?

自治会長



すがわら おさむ
菅原 理さん

6期11年目。国や市の動きを見ながら上手にその制度を自治会の機能に組み入れ「誰もが住みよい集落」になるよう努めています。

A. 努力は決して裏切らない

副会長



さとう みよし
佐藤 己義さん

6期11年目。自然豊かで、歴史ロマンあふれる矢ノ森集落のために、仕事と両立しながら長きに渡り副会長を支えて

A. 「自然の美」

- Photo

gallery -



地域外からの交流人口が増えることは住民の刺激にも繋がり、今後も大切にしていきたいことの一つ。



コミュニティサロン
今年度は計8回開催。郷土の歴史を学ぶ学習や、輪投げ、屋内ゲートボール、健康体操など各回充実した内容を企画!



藤棚の整備
藤原秀衡公ゆかりの金山址である「藤壺の滝」も同自治会が管理。藤が咲きほころぶ前には住民らで藤棚の整備を行います。



恒例の門松づくり
毎年門松づくり教室を開催し、2年に1回は昔ながらの鳥居門松を継承しています。消防防災部の防火訓練も同時開催。

大東 パサージュ 松川屋

東山町松川出身の初代(現店主の祖父)が、大正時代に地元松川村(当時)産の里芋を摺沢村内(当時)で販売し始めたことをきっかけに、戦前から酒類の販売許可も取得し、個人商店として展開。昭和50年頃に、2代目(現店主の父)が取扱商品を充実させ、コンビニエンスストア(小規模の小売店)化。昭和59年に2代目の急逝により現店主(3代目)が店舗経営を引継ぐと、手作り惣菜を充実させ、店舗運営のほか、町内の施設等や一般宅に食材の配達も行う。

店名の「パサージュ」はフランス語で道と道を結ぶ「通り抜け」を意味しており、3代目が命名。

「町の商店」だからこそ、新鮮なものを新鮮なうちに

手製の看板で伝わる入荷情報

大東町摺沢の「四つ角商店街」を通過する際、信号停止線横にある「手書きの看板」に見入ってしまった経験がある人は少なくないはず。「地域の台所」として愛される「パサージュ松川屋」3代目店主の鈴木公夫さんが約10年程前から手書きしているものです。店内では、酒類、食品、鮮魚、精肉、旬野菜や果物、手作り惣菜、日用品等を取り扱っており、特に妻・紀恵子さんが作る出来立ての惣菜が人気なのだとか。

「大東バイパスができ、スーパーなどが立ち並ぶと、昔からの商店街はだいぶお客さんが少なくなりましてね。うちは、家内が作る惣菜が人気で、煮物もすごく美味しいんですよ。お客様からリクエストがあった惣菜を作ることもあります」と語る鈴木さん。同店の強みは「新鮮なものを新鮮なうちにお客様に提供すること」だと続けます。

お得意さまの好きな食材を把握しており、「『活きが良い〇〇が入ったよ』と入荷の連絡をすると、待ってましたと言わんばかりに、晩酌の『あて』を購入しに来る男性客も多い」のだとか。イカを仕入れると店

内で塩辛にして販売することも。そんな鮮魚や惣菜等の目玉商品を販売する日に活躍するのが、入り口の立て看板。「地域の小さな商店だから、多くの人に情報発信をする手段を使わなくても、伝わる人に伝えたい」という思いから、時にユーモラスな表現も交えながら、アナログな「お知らせ」を続けています。

個人商店ならではの配慮で歩いて行ける馴染みの店

店舗経営において鈴木さんが何より大切にしているのがお客様とのコミュニケーション。103歳になるおばあさんや、押し車を押しながら歩いてくる90代後半のおばあさんなど、高齢の常連客(近所さん)もいます。店内の一角には休憩スペースとして反射式ストープとイスが置かれ、冬は購入した商品(お酒やコーヒーなど)を温めて飲むことも可能。「夏は、ここでビールも飲みますよ。それが楽しみで来店するおじい



- 1 大の相撲好きで錦木のファンである店主の鈴木公夫さん。
- 2 大人気の手作り惣菜。
- 3 当初は店主の一言日記だった看板。大相撲が始まると錦木の情報を掲示することも！

DATA
〒029-0523
一関市大東町摺沢字但馬崎15-1
TEL 0191-75-2437

さんもいます。私も人と話すことが大好きなので、配達がない日は一緒に飲むこともあるんです」と笑う鈴木さん。「夫婦二人での経営ですが、お客様と話語りをしながら、『この食材はこうして食べるといいよ』『今必要なものはない?』など、会話を通して出来るだけ寄り添った対応をしたい」と続けます。

取材日は「えびす講」の準備に追われていた同日。「えびす講の時には『どんこ』を仕入れ、みそ焼きにして販売している。今年もすでに20匹ほど予約注文が来ている」と、立て看板も「どんこ」のお知らせに。

同店には後継者がいませんが、「コンビニエンスストアとは謳ってはいませんが、実際には小さな商店であり、お客様が喜ぶ商品を通して、地域の方々と話しながら夫婦二人三脚で頑張っていきたい」と語る鈴木さん。今日の目玉商品は何かの、信号待ちが楽しみですよ。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴⑬
ボランティアは「小間使い」ではない



第59話

「自己実現」の手段であり、ポジティブなもの

夏から秋にかけての行事期間が少し落ち着きを見せ始め、勢いで頑張ってきたところからの解放感(疲労感)がある人も少なくないでしょう。とは言え、次年度の事業計画を検討する時期になっており、「コロナ禍前って、こんなだったかな?」という不思議な感覚も……。11月後半から、次年度事業のための「振り返り」や「計画の見直し」などの会議が多くなり、様々な立場で出席しているのですが、気になるのが「ボランティア」に関する話題。何が気になるかというと、「運営スタッフが不足しているから、ボランティアでカバーしよう」という意味合いのもの。違和感でしかありません。

そもそも「ボランティア」とは、「**個人**」の行動であり、**個人の興味関心のあることに、自分の都合の良い時間を使って関わる**ことです。だから「**無償**」であり、「**善意の行動**」になるのです。しかし、ここ最近のボランティアの考え方は、そうではありません。事業をする際の「**人員不足**」を補うために関わってもらうという「**穴埋め要員**」としてのボランティアになっています。「無償では申し訳ないから、弁当と交通費程度を用意して……」なんて、都合の良い条件をつけて「有償ボランティア」などと謳ってみる。いやいや、すべてにおいて間違ってますから!

市内のある高校は、「ボランティアとして生徒を派遣してくれる」というイメージが定着し、イベントの主催者等からものごく重宝されていますが、実は悩みを抱えています。当初は「声をかけてもらうのはありがたい」と、要請に答えていたものの、次第に「本来の目的」と違う方向性になってきたためです。学校側が生徒たちのボランティア活動をサポートしていた本来の目的は、**生徒たちが社会経験を積み、その中で将来の自分について考えたり、目標を見つけるため**でした。ところが、依頼ばかりが増えてしまい、「**何人の生徒を派遣するか?(派遣できるか)**」と、先生方が半ば強引に生徒たちを誘うという状況に。「**オーダーに対して応える**」ことが目的になってしまっただけは本末転倒です。

主催者側も、ボランティアが必要な「**どの業務に何人必要なのか**」を明確にする必要があり、「**何人出してくれますか?**」は、失礼な問い合わせです。**事業を主催する者の責任**が問われます。むしろボランティアで補わなければならないくらいの状況であれば、その企画自体、見直しか中止の決断が求められるのではないのでしょうか。予算面を調整し、有償ボランティアなど姑息な手段を使わず、しっかりアルバイト雇用をした方がじっくりくることもあるでしょう。

当センターでは、市民活動のスタッフバンク「イマカラ」を運用しています。コロナ禍でしばらく運用を止めていましたが、令和6年度に再始動予定です。「イマカラ」を始めた背景には、「**ボランティアを小間使いにしない**」というメッセージがあるのです。前述したように、「人が足りなければボランティアで」という構図を課題として捉え、ボランティア募集をする市民活動団体には、募集する業務内容を明確にもらい、ボランティアをしたい人には、「**自分の興味関心のあることや考え、特技を活かせる参加の機会**」を提供し、双方にとって**最良のマッチングになるような仕組み**です。もちろん「自分探しのために何でも良い」というケースもありますが、なるべく小間使いにしないように意識しています。

「イベント事業」は賑やかさを構成する大事な要素ではありますが、人員不足、物価高騰などの社会情勢から、運営が困難になってきていることも事実です。これまで同様のやり方でいつまでできるのか、「賑わいのあり方(つくり方)」も再検討していかないと、いずれ運営困難に陥る可能性があるのではないのでしょうか。

※この原稿を書いたのは令和5年12月。令和6年の元旦に能登半島地震が発生し、「災害ボランティア」を検討している方もいるでしょう。「災害ボランティア」は、「被災地のニーズ」に対して参加するものであり、阪神・淡路大震災の起きた平成7年は「ボランティア元年」とも呼ばれるほど、**市民が自発的に、自らの時間を割いて支援活動**を行いました。



当センターでも各種事業に高校生スタッフを起用していますが、募集する役割を明示し、応募制にしています。自分の興味のある仕事に対し、事前打ち合わせ等を経て従事してもらいます(写真は令和5年開催の「イチコレ」での高校生スタッフの様子)。

当地域における メジャーな民間療法を 聞いてみた

「民間療法」と言っても、その定義は曖昧です。ここでは「家庭レベルで行われていた(いる)、薬効のある動植物を用いた対処法(未病的なもの)」に絞り、ヒアリング等を通して収集した「実際に当地域在住者が経験した(家族の経験も含め)」をご紹介します。なお、「いちのせき市民フェスタ23」の中で行った「公開アンケート」の結果(10代~80代の22人)も反映しています。※身内も含め、総勢50人以上にヒアリングさせていただきました。

地域性や年代による差は薄い?

昭和10年以前生まれの人からの伝承が多い。

「ネギ湯」「首にネギを巻く」という風邪の対処法は、幅広い年代で認知され、平成以降生まれでも経験者が!「首にネギを巻く」という方法は、ネギに含まれるアリシンという成分により「あながち迷信ではない」とも言われています。同様に「内出血(たんこぶ等)に砂糖を塗る」という方法も平成以降生まれの経験者がいました。現在でも行っているという回答者も数名いて驚きましたが、調べてみると、全国各地で行われていた民間療法のようなのです(科学的根拠は賛否両論)。砂糖水にしたり、ツバでつけるパターンも。

「アロエ」は火傷の対処法として上がっていますが、内服による効果もあります。植物としてのアロエは、室町時代にポルトガルの宣教師が、日本に持ち込んだという説もあり、九州などで帰化しています。薬用としては、鎌倉時代に医学書に登場し、江戸時代に広まったようです。昭和初頭にブームとなり(胃や便秘への効果)、多くの家庭で鉢植えのアロエを常備していましたが、屋外では冬越しできないため、次第に各家庭から姿を消して行っただけです(屋内にしまい忘れ、いつの間にか枯らしてしまったという経験談多数)。

| | |
|------|--|
| 風邪発熱 | ネギ湯(≒刻んだネギを大量に入れた味噌汁)を飲む。 葛湯(or葛粉を練ったもの)を飲む(食べる)。 |
| 喉咳 | 焼いたネギを首に巻く。 |
| 頭痛 | オトギリソウを焼酎漬けた汁(原液)でうがい。 梅干しやスライスしたにんにくをこめかみに貼る。 |
| 腹痛 | 梅干しを漬けた汁を煮詰めて飲む(≒梅肉エキス)。 センブリ茶やドクダミ茶を飲む。 |
| 蓄膿症 | 切って揉んだドクダミを鼻の中に入れる。 出血にはチドメグサを貼る。 |
| 創傷 | 熊の油とムカデを混ぜて患部に塗る。 ヘビ焼酎やオトギリソウを焼酎漬けた汁を傷口に塗布。 揉んだユキノシタやスライスした朝鮮人参を患部に貼る。 |
| 内出血 | 「あおたん」や「たんこぶ」に砂糖を塗る。 |
| 火傷 | 山芋、アロエ、馬油等を塗る。 |
| 毒虫 | 蜂に刺されたら尿をかける。 |



井戸の横に ユキノシタ

井戸の周りや石垣の下など、日陰の湿地を好み、薬用・食用として植えておいた家が少なくなかった。「葉を揉んで患部に貼る」「葉を炙ると薄皮が剥けるので、それを患部に貼る」など、使い方は様々で、痒みや皮膚湿疹のほか、中耳炎(別名ミミダレグサと呼ばれるほど、耳の薬としても有名)や小児の引きつけなどにも使用したとか。井戸の撤去とともに、家庭から姿を消していった?



本当に苦い! センブリ

日当たりの良い山野や日の差し込む松林に自生。「何回(千回)振り出しても苦い」という強い苦みから名づけられた。薬用には、開花期に根ごと採集して土を払い、束ねて吊り下げ、乾燥させたものを使用(煎じる、熱湯に入れる、粉末化する等)。胃腸の不調時や二日酔いなどに効き「祖父が毎朝飲んでいました」という声も多く、「未病的に飲み続けるのが習慣化していた?」



花にも薬効 クズ(葛)

「葛粉をお湯でといて、風邪の引き始めや食欲不振時に食べた」という声が多くありましたが、「葛粉を作った」という経験者は見つからず。幼い子どもの体調不良時にも安心して使用できたのが魅力だったようです。



自然の絆創膏 チドメグサ

和名は「止血草」で、その名の通り、葉を揉んで、そこから出た汁を傷口に塗れば出血が止まるとか(ヒアリングでは「葉を傷口に貼った」という声が多かった)。繁殖力旺盛で、外来種のブラジルチドメグサは特定外来生物なので注意。

他にもたくさん! 薬効のある身近な植物

ヒアリングではあまり聞かれなかったものの、文献上では当地域でも使用されていたと思われるのが「ドクダミ(十葉と呼ばれ、様々な薬効あり)」「ヨモギ(お茶や薬湯に。血行促進作用あり)」。また、梅や柿にも薬効があり、梅干しや干し柿はもちろん、梅肉エキスや柿の葉茶など、使い方薬効が変わってきます。

「僧侶」や「薬屋」が普及する知識

「自然薬佐久」は明治6年、千厩町本町の「白石薬店」は「白石里仁堂」として明治37年に創業しており、当地域でも明治期には薬屋が複数存在していました。薬屋は、身近な動植物等を使用した対処法などをアドバイスすることもあったようです。また、そうした薬効のある植物の販売もしており、自然薬佐久では最近まで、ハトムギ、お灸用のヨモギ、ドクダミ、クチナシ、センナなどを取り扱っていたそうです。当時は原材料で販売されていたものも、次第に「健康食品」として製品化されていき、サプリメントや健康茶として、気軽に取り入れられるようになっていきました。

「僧侶」も庶民に知識を普及した存在です。藤源寺の佐藤住職によると、薬草等を用いて社会救済事業を行っていた「施薬院」に代表されるように、僧侶は修行や社会貢献の一環で、医療や困窮者の救済を行っていました。識字率の低い山村においては、字の読める僧侶は学識者であり、僧侶間のネットワークで知識も豊富。京都や海外にも通じるネットワークがあり、平泉に近い当地域では、僧侶によって学問や知識が運ばれてきた可能性も高いと言えます。

当地域にも各所に「薬師如来(お薬師さま)」がありますが、病氣治癒の願掛けに行った折に、僧侶から身近な対処法を教わることがあったかもしれません(勝手な推測です)。

※参考文献等は当センターHPにてご紹介します。

地域の「気になること」をセンタースタッフが独自に調査!

センターの 自由研究

ミッション 83 暮らし調査 「(家庭における) ファイルNo.24 民間療法」

「風邪を引いたら首にネギを巻く」など、体調がすぐれない時などに、家庭内で行われてきた「民間療法」。経験や伝承に基づき、広く民間で伝承されてきた治療方法を指しますが、その中でも「おばあちゃんの知恵袋」とも呼ぶべきレベルの「暮らしの知恵」にスポットを充てることで、当時の暮らしに思いを馳せてみます。そこから見えてきたのは、現代人の暮らしにも取り入れられるべき考え方でした……!

※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

■神仏・神霊頼みが近代まで
当センターのスタッフは30~40代のみで、年代がさほど離れていないにも関わらず、認知度が大きく分かれたのが、「傷にユキノシタの葉を貼る」「たんこぶに砂糖を塗る」など、各家庭で実践されてきた、ケガや体調不良時の対処法でした。

この違いに興味を持った我々は、まずは家族を中心に「おばあちゃんの知恵袋」レベルの対処法を収集。それを整理し、地域やイベント会場でのヒアリング等を行いました。

地域や年代を問わず、経験者が多い方法もあれば、その逆もあり、次第に湧いてきた疑問が「これらの対処法は誰がいつ頃に考案し、広まったものなのか」。特に興味深いのが、「目にももらいができたら〇〇をする」等の、俗信的なもの。何の根拠もなさそうな行為が伝承され続けていることが不思議でした。

しかし、文献調査をしていくと、日本における病氣への対処法といえども、神仏・神霊の力に頼る「願掛け」「祈願」が庶民の主流であり、時にはオカミサマのような存在に頼ったり、「お百度参り」のような行いをしたり……。今のように入っても、そうした祈願に加えて、ものもらいのような軽微なもの

は、「井戸に小豆を落とす」等の俗信を願掛けに行っていたようなのです(おそらく全国の農村に共通)。

■「養生」と「未病」
医療機関が身近でなかったことに加え、飛鳥時代以降、仏教の伝来や遣隋使・遣唐使などにより「中国伝統医学」が伝来すると、天然に存在する薬効を持つ動植物を用いた治療法が日本でも模倣されていきます。

それらは自然界に存在する動植物、自然環境を活用して、生命力あり、鎌倉時代以降、禅宗の僧侶などが僧医として一般民衆に教えていた(施していた)ともされ、薬効を持つ動植物を用いた対処(治療)法は徐々に庶民にも広まっていきます。

当初は中国伝統医学を忠実に模倣していた日本ですが、伝来から1400年以上の長い年月を経て、日本人の体質や生活に合わせて独自に発展していき、江戸時代に日本独自の医学として「漢方」が確立します。

同時期に本草学者の貝原益軒が『養生訓』で予防医学に通じる考え(「腹八分目」など、健康な時から気を付け、欲に身を任せない等)を庶民にも普及。「養生」という考え方も、漢方の「未病」の考え方は「病氣にならない生活を送る」「体

薬屋と『赤本』、配置薬は「とうじんさん」

江戸時代には開業医や薬屋のほか、薬の行商(配置薬のルーツ)など、庶民にも医療が少し近づきました。当地域においても「とうじんさん」と呼ばれる薬の行商が富山県などから来ており、「配置薬」は現在もなお我々の暮らしを支えています。

また、当時の薬屋は「百味筆筒」などと呼ばれる複数種類の生薬を保管する筆筒があり、「乳鉢」や「薬研」「押切」等を使用して、それぞれの症状にあわせて調合していたのだとか。

大正14年に発行された『赤本』こと『家庭における実際の看護の秘訣(築田多吉著)』は、海軍の看護特務大尉だった著者が、地方で通用している民間療法を収集し、自身が試した後、効果があったものを紹介した本で、何度も重版され、民間療法のバイブル的存在だったようです。

このほか、自然療法や漢方、民間療法に関する本は多数出版され、生活に取り入れられていき、「おばあちゃんの知恵袋」として、家庭内で実践されてきたのだと考えられます。



大正時代の「自然薬佐久(一関市大町)」店内を描いたイラスト。昭和54年に先代が当時を思い出して描いたもので、百味筆筒なども描かれている。同店では現在も生薬由来の商品を取り扱っている。

が出す何らかの初期サインに気づき、自身で心と体を管理する」というもの。発病に至る前に、各家庭で天然の動植物の薬効を利用して対処する「おばあちゃんの知恵袋」のルーツは、江戸時代にあるのかもしれない。

177/107,***

塩竈 一常

平成24年4月に放送開始した「一関コミュニティFM」パーソナリティ。立ち上げから関わり、令和0年より放送局長に。一関二高卒業後、専門学校で放送を学ぶと、関西のコミュニティ放送パーソナリティへ。複数放送局で経験を積み、平成19年には帰郷とともに奥州市の「奥州FM放送」の立ち上げにも尽力。昭和53年、一関市生まれ(在住)。



第115回 一関コミュニティFM株式会社 放送局長 塩竈一常 ✕ いちのせき市民活動センター センター長 小野寺浩樹

「ラジオ」は市民の「広場」 ～「本音」をつないで、支える【後編】～

「FMあすも」こと「一関コミュニティFM」は、公設民営の放送局でありながら、現在は8割を民間スポンサー収益で賄っています。資金面等で閉局に陥る放送局もある中、間もなく12年を迎え、いよいよ「地域性」を乗せていこうという今、「市内にコミュニティ放送がある」意義を考えていくと、我々市民が担うべき「役割」も見えてきました。(2回シリーズの後編)。

小野寺 「ここまで」の10年間は「ラジオがある生活」を定着させるために、あえて地域色は濃くせず、基本的かつ良質な「放送」を心がけてきたということでしたが、では、次の10年間はどうかお考えですか？

塩竈 震災後、寂しい思いを抱えている人などに、寄り添うと言うか、隣にいる、それもピタッと隣に座っていて、肌の温もりが伝わってくるような、そんなラジオにしたいと思ってきました。そういう人の孤独が分かっていたら、そこに対して解決策というか、「こんな制度がありますよ」ってつないであげられるようなラジオ局が理想なんです。なので、リスナーさんとよりつながっていききたいですね。

小野寺 以前には市民がスタジオゲストで参加するコーナーもありましたよね？

塩竈 一番の理想はそうなんです。市民が自分で話をし、それ

が必要だ！」って、誰かが言ってくれることで、それがムーブメントになることだってあると思う。ラジオにはそういう力がある気がしますね。

塩竈 「今〇〇で困ってます。困ってるけど言う場所がないからラジオに送りました」「みたいな、本音を言える場所が一関においてラジオになるってどうか。それを一つの「情報」として僕らが伝え、それを聞いた誰かが一緒に考えてくれたり「あ、自分が助けても良いのか」って、それがコミュニティFMの根幹かなと思っています。

小野寺 今、地域では歴史あるお店の閉店が続いていて、この先も残念ながら続きそうです。地域性や地域文化とも言えるものがなくなっていくのをただ見ているだけというのは、本当に危機感でしかなくて。

塩竈 「コミュニティ放送がある町で、情報不足で人が亡くなるのは恥ずかしいことだからね」って言われたことがあって。閉店の話も、失くしてしまっただけから伝えるんじゃないかと前に伝えて、何とかできないかと

をまた別の市民が聞いて、「良い話してるな」って思う連鎖。それを引き出せるパーソナリティが不在になった時期があった、途切れていましたが、今また育ってきましたので、本格的にやっていきたいな、と。単なる取り組み内容だけでなく、想いやきっかけ、家族や関わる人の支えとか、そういうことをしっかり引き出せるような。リスナーさんもそういう部分が聞きたいという風に育ってきてくれていると思うんです。

小野寺 イベントなど、表立って何かに取り組む人のピックアップになりがちですが、例えば地道に地域の役職で支えている人とか、そういう人の頑張りや本音も引き出して、つないで欲しいですね。

塩竈 光が当たりがちな人の周りにも人がいるので、それを伝えることは大事だと思います。実は震災後、放送から離れようと思ったことがあって、それ

伝えたいですよ。そのためには、市民全員が取材班のような気持ちで、かなり早い段階で情報をもらえるような関係性が必要ですよ。

小野寺 失ってはいけないものが失われていく今、市民力でカバーしていくことが大事ですね。

塩竈 そうやって「失っちゃいけない」って口に出す人の存在も大事で。アナウンサーには立场上、言いにくいこともあるんです。なので「リスナー育て」も重要なんです。

小野寺 ラジオ局というクリエイティブな職業ができて、メディアの仕事がしたいという子の選択肢が地元にあることは大きな存在だと思うし、あとはキラキラした部分だけでなく、塩竈さんのそうしたマインドもつながっていくことを願います。

塩竈 誰かをスターにしたいのではなく、地域に活用してもらいたいことを模索していて、それがあすもを末永く残していくための道だとも思うので、民間主体の、健康的な放送ができる局であり続けたいと思います。

※誌面未掲載の「こぼれ話」をホームページで公開しています

※3 編集集中
※4 編集集中

※1 様々な生活上の困難に直面し本人の力だけでは個々の支援を的確に活用して自立することが難しい人に対し、個別のかつ継続的に相談・カウンセリングを行い、問題を把握し、必要な公的サービスのコーディネートなど、自立に向けた個別支援を行う専門員
※2 編集集中

ですと「防災が大事」と伝えてきました。防災の先を考えると、あれだけの震災があった時に、その先の「何か」を準備していなかった。それで、パーソナル・サポーターの資格を取ろうと思つて講座を受けたら、当事者に対しては、その人が何を思っているのかをまずは引き出して、その的確な情報を伝えるのが大事だと言われ、「今までもラジオでやってたな」と。これまでのことを、もう少し親切に、「いざという時のために」って情報を出していければ、ラジオはもっと頼りにされるんじゃないかなって。

小野寺 いざという時って、「災害」だけでなく、「日常」だったりしますからね。病気とか、介護とか、困窮とか……。

塩竈 そう、「こういう仕組みがある」というのを知っておくだけで、命や心が救われることがあると思うんです。

小野寺 今は「本人支援」が中心の社会なので、認知症や障がいなど、本人に対しての支援はあっても、それを支える家族な

どへの支援はなくて。支えてくれる人への支援がないのは課題だなと思つていて……。

塩竈 そういう声って、自分たちでは注目するのが難しい部分もあるんで、聞いている人が「こういう声も取り上げて欲しい」って出してもらえるのもラジオの良さかな。自分も高校生時代に、けっこう重い悩みをオールナイトニッポンに出したことがあって。それが読まれたんですけど、パーソナリティが「リスナーはどう思う？翌週までに送ってください」って呼びかけてくれたんです。翌週、本当にまた取り上げてくれて「いろんな意見があって、答えはないけど、これだけの考え方があることを知って欲しいから、これを全部送りますよ」って、僕に送ってくれたんです。それが「ラジオってすごい」と思つた原点だし、この経験から「自分が答えを持ち合わせていないでも良い」と思えるようになりましたね。

小野寺 すごい経験ですね。でも同じように「みんなが思ってるけど口に出せないこと」って絶対あって、例えば「家族支援